

記録
35ミリ
カラー／38分／英語版

- 企画
海外貿易振興会
- 監修
通商産業省

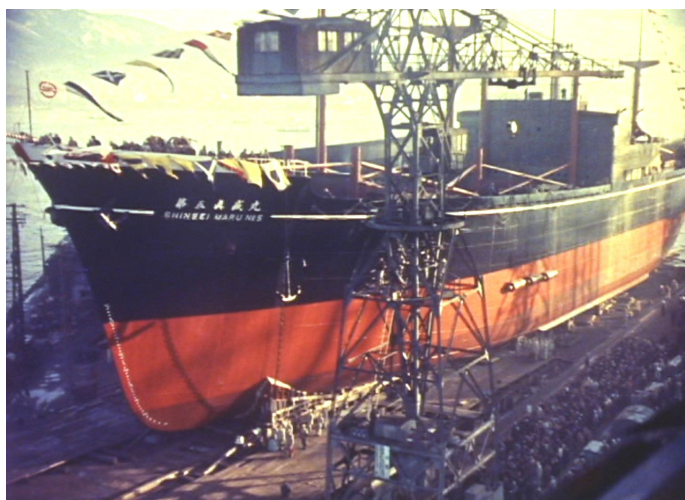
スタッフ

- 製作
村山英治
- 脚本
日高 昭
富沢幸男
- 演出
富沢幸男
- 撮影
清水 浩
- 照明
阿部靖英
- 音楽
長沢勝俊
- 録音
片山幹男

〔日本の近代産業〕

第1回日本紹介映画コンクール最高賞 朝日新聞社賞

桜映画社が手がけた最初の産業映画は、通産省と海外貿易振興会がアメリカのテレビに放映するために企画した海外宣伝用映画であった（海外貿易振興会は、のちに日本貿易振興会、通称ジェトロと改称された）。この映画は、桜映画初のカラー作品で、その頃はまだ珍しかった35ミリのイーストマンカラーを使用した。その内容は、戦後の技術革新期の日本の近代産業を描いている。



日本は、科学技術の発達によって、この1世紀余りの間に近代的な産業が長足の進歩を遂げ、東洋一の工業国となった。水産業は日本の誇る産業のひとつで、獲れた魚は加工され、缶詰として利用される。食品工業では、生産量の約半分が輸出されている。豊富な森林資源を利用して木材工業も盛んだ。合板、中でもベニヤチェストはアメリカなどに多く輸出されている。優れた木材を使ったギター、ヴァイオリン、ピアノなどの楽器の輸出も増えている。繊維産業では伝統産業である絹織物があるが、輸入原料による綿紡績業では、生産高は世界第5位、輸出高は第1位に伸びている。化学繊維工業でのアセテートやナイロンなどの合成繊維も発展してきた。今、日本人は5人に1人の割合でカメラを持っているといわれる。光学機械のレンズの精度の高さも世界的だ。窯業のうち、陶磁器、板ガラス、セメントなどは戦後の復興とともに輸出も増大している。

日本4大工業地帯のひとつ、京浜地帯。産業構成は軽工業から重工業へと移りつつある。工作機械は輸出の花形で、組立作業による自動車工業も伸びている。造船も戦後の荒廃から立ち直り、イギリスに次いでいる。鉄の町、北九州の八幡では製鉄工業が設備の合理化とコストを下げる努力によって日本の産業の推進力になっている。